その十八

「中小公共建設業者」の情報発信について、その必要性を繰り返し語っている桃知利男さんは、その著作『桃論～中小建設業ＩＴ化サバイバル論』で、中小建設業をこう定義づけています。

この業界をめぐる問題は、「中小建設業はまるで水槽の金魚のようなものだ」という比喩で表現できるでしょう。水槽の中の金魚は、野生の魚のように自ら餌を見付けようとすることはありません。いつも天上（水面の上）から降ってくる餌をじっとまっているだけです。

また彼自身のブログでは、中小建設業の現在をこう綴っています。

「おぼんのような世界」とは、閉じた円環の社会であって、それは外から見れば「なんだかよくわからないもの」でしかない。

「なんだかわからないもの」に出会ったとき、人は二つの行動を選択する。

一・「なんだかわからないもの」を「なんだかわかるように」しようとする

二・無視する

（中略）

つまり「おぼんのような世界」は自ら情報を発信（物語＝プレゼンテーション）できないことで、好き勝手に解釈されている。つまり自ら情報を発信しない限り「なんだかわからないもの」は「なんだかわからないもの」のままなのであり、それは好き勝手に解釈されるものでしかないのである。

それを「好きにすれば」と言ってきたのが「おぼんのような世界」であったのだが、たぶんもう言えなくなってしまったのは、「おぼんのような世界」そのものが破壊圧力にあっているということなんだろう。

（http://www.momoti.com/blog2/2008/06/post_251.php より）

この論を踏まえた上で締めくくりをしたいと思います。